

18. 右室負荷疾患と²⁰¹Tl 心筋シンチグラフィー

近藤 誠 久保 敦司
 正木 英一 橋本 省三
 (慶大・放)
 大鈴 文孝 山崎 元
 半田俊之介 中村 芳郎
 (慶大・呼循環内科)

右室負荷疾患において心筋シンチグラフィーを施行し、その特徴および胸部単純写真との関係について検討した。対象は右室の圧・容量負荷疾患20例、特発性心筋症6例、血行動態正常8例である。右室負荷疾患では、正常者に描出されぬ右室自由壁が撮像された。その描出程度を左室自由壁部分の R-I activity と比較することにより、0および3+ までの4段階に分類した。

胸部単純写真より CTR を計測すると、描出度0群、1+群および2+群との間に有意性は認められなかった。胸部写真側面像において retrospinal space の obliteration の程度を計測すると、1+群と2+群の間および0群と2+群の間で有意差を認めた、しかし、0群と1+群では有意差を認めなかった。また単純写真上総合的に判断して右室負荷を診断できない症例でも、しばしば右室壁の描出を見た。

そこで心臓カテール検査による右室収縮期圧についてみると、0群では全例正常値をとり、1+群では明らかな異常高値をとるものが多く、両者間に有意差が認められた。したがって、Tl-201による右室心筋シンチグラムは、正側2方向の胸部単純写真に比べ、右室負荷の判定により鋭敏で、特異的な検査法であると考えられる。さらに描出された像から、圧負荷、容量負荷疾患の鑑別診断の可能性も考えられ、有用な方法と思われる。

小出(東大・2内) より心電図との比較、志田(珪肺労災・放)より疾病の状態による変化の疑問が出されたが、現状ではあまり統計的に返答できないが、心電図より感度のよい症例もスライドで供覧した。治療による変化の症例はないが、心カテとの比較で関連が強い。

19. 一小児例の塩化タリウム心筋シンチグラフィーの経験

辻 敦敏 小佐野 満
 (慶大・児)
 佐藤 正昭 浅石 嵩澄
 (清瀬小児病院・循)
 石田 治雄
 (同・外)
 福元 忠典 大森 一彦
 (同・放)
 石井 勝巳
 (北里大)

症例は12歳男児、学校検診での胸部レ線写真上の心拡大を主訴として来院。肘に運動時易疲労性をみる他に既往歴、家族歴に著変無かった。聴診上心搏動最強点が胸骨左縁約0.5センチにあり、器質的心雑音を認めず。胸部レ線上心胸比65パーセント、心電図上ST、T波の平低下、二相性波を認めた。心臓カテール検査では心内圧、酸素飽和度とも正常範囲。左右室造影で両室の右方転位をみ、左室の左側に巨大なスペースが存在し、心収縮と共に憩室様のものが造影された。²⁰¹塩化タリウム1.5mCiを静注、左室および軽度右室が描出され前述の巨大なスペースはColdareaとなった。現在、心臓憩室、心室瘤は明瞭な区別がなく、ただRuptureや血栓症の報告もあり、手術を考慮すべきものと思われるが、タリウム検査結果をみる時、われわれの同様の症例の手術経験やCheslerらが言う様に安易に決めがたい。

20. 心プールについて

長瀬 勝也
 (順大・放)
 西条 敬 阿部 博幸
 (同・内)

心筋梗塞の症例を主とし心プール像と心室心房造影所見を対比し比較を行なった。

特に左心室瘤及び増幅弁狭窄症に伴った左房内血栓、左房内粘液肉腫について検討を行なった結